

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19992

研究課題名（和文）ペルシア詩における比喩の意味連関をめぐる基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on the semantic association of metaphors in Persian poetry

研究代表者

中村 菜穂（NAKAMURA, Naho）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・講師

研究者番号：40964995

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はペルシア文学の表現上の特徴である比喩的な語彙体系の解明を目指し、基礎的な議論の集約、定期的な研究会の開催、現地調査と資料収集および日本語の資料作成を行った。特に、この分野の重要な著作であるモハンマド・レザー・シャフィーイー・キャドキャニー著『ペルシア詩における詩的形象』（1971）の読解・分析を行い、イランにおけるイスラーム修辞学を基礎とした文学的議論の流れとその背景について基礎的な理解を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ペルシア文学の表現上の特徴である比喩的な要素については、ペルシア語で書かれた修辞学関連の著作や欧米での研究がいくつかあるが、日本語での研究はごくわずかにとどまっている。本研究はイランにおける優れた学術成果を咀嚼し、明らかにするとともに、将来的に諸言語におけるイメージ論、メタファー論との比較やペルシア文学に関する新たな議論に示唆を与えるものとなると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to elucidate the Persian system of figurative expressions, an explicit feature of its literature, and involved the accumulation of basic discussions, the holding of regular study meetings, field research and the collection of materials and the preparation of Japanese-language sources. In particular, the reading and analysis of an important work in this field, Mohammad Reza Shafi'i Kadkhani's Poetic Figures in Persian Poetry (1971), provided a basic understanding of the flow of literary discussion based on Islamic rhetoric in Iran and its background.

研究分野：ペルシア文学

キーワード：ペルシア文学 詩的形象 比喩 イスラーム修辞学 イラン現代詩

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、イラン現代詩の現代性への問いが出発点となっている。ペルシア語の詩の歴史全体において、比喩的言語の使用は際立った特徴として知られており、ペルシア語およびヨーロッパ言語等でも研究が進められてきた。そのなかにはペルシア詩の伝統的な比喩表現に関して目録化を試みた例もあるが、必ずしも成功していない。その理由はペルシア語における「喩え」の性質そのものにあると考えられる。モハンマド・レザー・シャフィーイー・キャドキャニー著『ペルシア詩における詩的形象』(Mohammad Reza Shafi'i Kadkani, *Sovar-e khiyal dar she'r-e farsi*, 1971. 以下『詩的形象』と略記)は、ペルシア詩の始まりの時代である西暦11世紀以前の詩を主に対象とし、イメージ表現に関わる問題提起を行うとともに、その変遷過程を分析した研究書であり、現在のイランにおける文学研究においても基礎的な文献の一つとされている。同書の読解を通じて、ペルシア詩における詩的言語の性質を見極め、近現代における詩の変化を考察することが本研究の動機となっている。

### 2. 研究の目的

本研究は、ペルシア文学の特徴である比喩に依拠した詩的語彙体系の解明を目指し、そのための議論の土台として、この分野の重要な著作であるシャフィーイー・キャドキャニー著『ペルシア詩における詩的形象』をもとに現代の基礎的な議論を集約し、資料収集を行うとともに、日本語の資料を作成することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究は、『詩的形象』の翻訳と分析、先行研究の整理、関連資料の作成を中心に進められた。定期的に研究会を開催し、研究協力者から訳文・内容に関する指摘を得るとともに、用語や論点についての議論を行なった。また、イランへの現地調査を行い、現地の研究者に面会し、資料収集を行なった。

### 4. 研究成果

本研究の成果は以下の点にまとめられる。

#### (1) 資料読解と翻訳:

『詩的形象』本文に関しては、始まりから第一部の前半まで訳出を終えた。当初目標とした分量には達していないが、この点は、主に注や参考文献に挙げられている先行研究に関する調べ物や、用語の検討等に時間を要したことによる。ここまでの研究で明らかにできた点は以下である。

キーワードの整理: 「想像 (khiyal)」に関わる語彙群と、「形象 (surat)」に関わる語彙群が本論で特に重視されているが、他の比喩に関する修辞学用語 (majaz, tashbih, este'are, kenaye, tamsil 等) は具体的な分析の際に用いられている。「詩的形象 (sovar-e khiyal)」の語はヨーロッパ言語における image に対応するものとして提示されているが、原理的な面では、人間の想像力による自然への能動的な働きかけによってもたらされたのが詩的イメージ (tasvii) であり、その想像における飛躍の力は *tasarraf* (改変) の語で示されている。

アリストテレス詩学との関わり: 本論の分析における土台となっているのはイスラーム修辞学である。この分野に関しては日本での研究も途上の段階にあるが、今後の発展が見込まれる。特に、アリストテレスによる比喩の定義がヨーロッパ修辞学で迎った展開と、同じ箇所についてのイスラーム圏での解釈とは根本的な点で異なっている。この点に関わる問題として、直喩・隠喩に関する理解の仕方については今後の研究で詳しく扱うこととしたい。

他分野との関わり: イスラーム修辞学に関わって、イスラーム圏における諸学の影響も多少考慮すべきであると考えられる。医学は想像力、イメージと言語能力に関する理解と、哲学は想像の機能に関する認識と、神学は修辞学用語の概念規定とクルアーンに基づく種々の制限に主に関わっている。

擬人法と誇張: 本論が特に注意を払っている分野に、「擬人法」と「誇張」がある。前者は、伝統修辞学ではほぼ見過ごされてきたが、ペルシア詩の諸作品を論じるうえで重要なものとみなされている。「誇張」は文学的表現を評価するうえでの基準の一つとして重視される。

詩的形象のクリシェ化: 著者はペルシア詩の比喩的な語彙体系の成立過程を、詩的形象の固定化、規範化によるものとして分析を行なっている。いわゆる「死んだ隠喩」の議論に連なるものだが、ペルシア文学に関してはそれらの定型句や決まり文句が、なお完全に固定化されることなく文学において持続している点に注目すべきであると考えられる。この点も今後の課題としたい。

本書の読解の過程で、イスラーム修辞学に関する情報の整理を行い、関連分野のペルシア語著作に関する調査を行なった。その内容に関して、2022年度および2023年度のイラン研究会で口頭発表を行った。

(2) **研究会の実施：**

研究協力者とともに定期的な研究会を開催し、『詩的形象』翻訳に関する指摘をいただいたほか、内容に関する議論を行なった。また、2023年8月にはペルシア文学研究者サラ・サイディー氏に依頼し、大阪大学にて「イスラーム世界およびイランにおける修辞学(パラガ)小史」と題する公開講演会を実施した。

(3) **現地調査・資料収集：**

2022年度および2023年度にイランでの調査を行い、現地の研究者に面会するとともに、資料収集を行なった。特にイランの場合には、国内で出版された書籍を国外で入手することが難しく、それらに関する情報も限られていることから、現地での調査が重要である。また、調査を通じてイランでの研究状況についても一定の知見を得ることができた。

(4) **口頭発表：**

2022年度末、2023年度末に開催されたイラン研究会で、研究の進捗状況に関する口頭発表を行なった。そのほか、2022年10月のオリエント学会で「モハンマド・タギー・バハールにおけるサブク概念の検討」と題して報告を行ない、『詩的形象』の先駆的著作と考えられる、バハールの『文体論』(Mohammad Taqi Bahar, *Sabk-shenasi*, 1942)におけるサブク(文体、スタイル、様式)の概念と、文学史的観点で捉えられた詩的言語の変遷の問題について指摘を行なった。この報告については、研究期間内の論文執筆には至っていないが、今後改めて執筆に取り組む予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村菜穂
2. 発表標題 モハンマド・タギー・バハールにおけるサブク概念の検討
3. 学会等名 オリエント学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村菜穂
2. 発表標題 ペルシア詩のイメージ論について
3. 学会等名 イラン研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中村菜穂
2. 発表標題 イラン現地調査報告 / ペルシア語修辞学書について
3. 学会等名 イラン研究会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

公開講演会：  
 講演者：サラ・サイーディー氏（大阪大学招へい研究員）  
 題目：「イスラーム世界およびイランにおける修辭学（バラガ）小史」  
 使用言語：ペルシア語、日本語  
 開催場所：大阪大学箕面キャンパス（対面、オンライン併用）  
 開催日：2023年8月23日

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤井 守男  (FUJII Morio)	名誉教授	
研究協力者	サイーディー サラ  (SAEIDI Sarah)		
研究協力者	北原 圭一  (KITAHARA Keiichi)		
研究協力者	服部 麗  (HATTORI Rei)		
研究協力者	田代 智恵子  (TASHIRO Chieko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------